

第六章

鳶尾の宿命

それから日々が過ぎ、学校の遠足の日がきた。先生と生徒たちはバスに乗って海^{うみ}辺の水族館へ向かった。室内は少しムツとして、海水の塩辛い匂いが漂^うっていた。水槽^{すいそう}の中で、魚は右往左往しているが、結局は波に寄り添^よって流されるしかない。それを目の当^またりにしたサブリナは、一ヶ月前に見た光景を思い出し、深い悲しみを覚えた。魚たちが水槽に閉じ込められているかのように、自分が大切にしていた友情も過去に留まるしか

第六章 鳶尾の宿命

ないのかもしれない。あの美しい思い出たちは最終的にたくさんの小さな泡となり、広大な世界に消え去ってしまった。頭を上げて周りを見渡した。三月の満遍なく広がる春色とは違い、初夏の新緑が広がっている。すべてはもう変わってしまったが、彼女だけが風の中に立ち吉報^{きつぽう}①を待っているままであった。

振り返ると、エイヴリーがゆっくりと歩いてきて、手に花束を持っていた。緑の葉の間に月季花^{げつきか}が点在しており、まるで寝ぼけているように、花弁には露の滴^{しずく}がついていた。

「春が過ぎ、夏が来た。天気もいいし、遠足に来たんだから、楽しく遊ばうよ」

と言って、淡紫色^{たんししよく}のを一輪選んで渡した。その色は宇宙の

(1) 吉報 良いい知らせのこと。

星雲せいうんのように深く、また朝霧のように浅い。月季げつきはよく花の女王として称たえられ、しかも珍しい紫色をしているため、さらに貴重に見えた。少女は花を受け取り、気鬱きうつの顔が一瞬で歓喜に変わり、手に持った月季げつきが彼女を慰めたかのようにだった。

話がここまで進んだところで、隣りのエイヴリーは少女を軽く押して言った。

「当時はついでに取った行動だけど、まだ覚えてくれたんだ」

「うん、その時から言おうと思ってた、ありがとう！でもさ、あの日の昼食の時は……」

「デラニーがそんなことをするなんて、本当に思いもしな

かった」

「違うの！彼女は理由もなく騒いだわけじゃないの」

とサブリナは明確に否定し、続けて説明した。

「モニカの問題だったの。デラニーはずっとモニカを友達だと思っていたのに、モニカはいつも二人はただのクラスメイトだと言って、時々デラニーの悪口も言ってた。その人柄からすると、私のことも絶対裏でなんか悪く言ってたに違いない。だからデラニーがあの日過剰反応したのもなんとなく理解できるよ。私がばか過ぎて、じんせい人性の怖さを知った」

窓の外に広がる紺碧色こんぺきの空に一筋の蜜柑色みつだんが加わっていた。夕日が西へと傾く、霞光かこう②は遠くて疎まばらな雲の隙間すきまで、空の境

(2) 霞光 空が日の光を受けて赤く見えるもの。

目を茜色^{あかねいろ}(3)や堇色^{すみれいろ}(4)で染め上げ、まるで異次元^{いじげん}にいるような感じがした。相手の困惑した顔を見て、ついにその日の出来事を包み隠さずに伝えると決めた。

正午になり、頭上^{ずじょう}の太陽は地面を熱く照らし、まるで真夏のようだった。生徒たちはケーブルカーで山の頂上^{ちようじやう}に直行し、そこで緑の場所を見つけて、色とりどりのマットを広げ、ピクニックを始めた。見上げると空色が一面に広がり、新鮮な空気には馥郁^{ふいく}たる⁽⁵⁾草木^{くさき}の香りが混じっていた。遠くに見える澄んだ山々と水は、まるで動く山水画のようで、心が豊かさと快楽を味わった。

サブリナはモニカを探したが、彼女はデラニーと一緒に食事をすると言った。

「仲直りしたの？前は嫌いって言ってなかったっけ？」

と訝いぶかしげに尋ねると、彼女は不機嫌そうに答えた。

「しょうがないよ。デラニーと一緒に食べようって誘ってき
たの。こっちから断りづらいし、今は一緒にプロジェクトやつ
てるから。あの女魔王みたいな人に逆らうわけにはいかないし。
授業中にふざけたり、いじめられたりされたらどうしようもな
い！でもね、食べ終わったらうちのところに来ていいよ。遊ぶ

(3) 茜色 夕暮れ時の空の形容などに良く用いる赤色。

(4) 菴色 すみれの花の色からきた紫色。

(5) 馥郁たるよい香りが漂っているさま

時間あると思う」

サブリナは真顔で戻り、さっさと食事を済ませて、待ちきれずモニカのところへ向かった。その時、デラニーとウェンディは話に夢中で、彼女のことを無視していた。だから、二人は会うと、まるでミルクがコーヒーに出会ったかのように、周りの目を気にせず、じゃれ合い始めた。彼女はスマホを取り出し、相手が気づかないうちにシャッターを切り、ブサイクな写真を撮った。

「ねえ、やめて！今すぐ消してよ！」

反応した少女は素早くスマホを奪おうとしたが、体を背けて避けられた。

「この写真、とても面白いよ！みんなに見せようかなあ」

「あなた大丈夫？今すぐ消して！」

「嫌だ。もしジャンナに見せたら、これを話題にして話せるかもしれないね！どう？うちに感謝する？」

と言いながら、ボーっとしているジャンナを指さして大笑いした。二人は追いかけてこを始め、盛り上がっていた。

「サブリナ、もういいよ……なんでモニカのスマホを奪おうとするの？」

と突然の叱責しつせきが平和な雰囲気やまあいを切り裂き、朗々とした声は山間に響き渡り、事態は制御できない方向へと発展していった。遊んでいた二人は戸惑いながら振り返った。デラニーが両手を腰に当て、まるで道徳的な高みに立っているかのように正義を

盾にし、軽蔑した顔で見下ろしていた。

「どうして毎日無理やり、付きまとって、イジメるの?」

そう言って「罪」を訴えた。サブリナは非難の集中砲火に
当惑したが、その後、激怒し、弱味をみせずに反論した。

「いじめ? 話の筋がわからない君に言われることじゃないよ。

これは私たちのことだから、関係ないでしょ」

濡れ衣を着せられる感覚が不快で、無意識のうちに口調が速
くなっていた。同時に、息を整えていることから、まだ怒りを
抑えていることを示していた。しかし、相手はそれを気にせず
続けて言った。

「あんた、目大丈夫? モニカが嫌がってるのが見えないの!」

「それが何? モニカ自身何も言ってないのに、なんであなたが

口出しするの？」

「彼女は友達だから、いじめられているのを見過ごせないの！
この世界の愛と正義のため、月に代わってお仕置きよー！」

「友達」という言葉が耳に入ってきた時、少女は何かがおかし
いと感じたが、その場で考える余裕は全くなかった。急激に上
昇する血圧とアドレナリンのせいで、神経末梢がピリピリした。
そして、彼女は一步前に進み、冷たく鼻を鳴らし、その視線は
秒で鋭利^{えいり}になった。

「余計なお世話よ！今、私のことを悪く言う資格あると
思う??」

「じゃあ、何をしたいの？」

そう言う口調には慌てた感じが隠れている。

「聖母ぶるのはやめてよ。偉そうに言ってるけど、普段から聖人君子？」

と言って足音を立てて迫り、目に怒気どきの火を灯した。その時、彼女は憤懣ふんまん⑥に支配されており、一言一句が痛烈つうれつだった。足元に碎ける小石に震える筋肉、そして癡猛どうもうな顔つきまで、どれもが状況の厳しさを表現していた。デラニーはその構えに気が動転どうてんして口もきけなくなり、手を振り回したが、誰も助けに来なかった。何歩か後ずさりし、最後には誤って空中に足を踏み入れ、重心を失った花瓶の如く、崖から転落した。少女は手を伸ばして掴もうとしたが、間に合わずに擦れ違った。延々と続く悲鳴が鳴り響いた後は、寂静じやくじよう⑦が訪れた。

第六章 鳶尾の宿命

霎時^{しょうじ}（8）、

天氣は変わり、さつきまで太陽が草地^{くさち}を明るく照ら

していたのに、今は重たい雨雲に遮られていた。厚い雲が湿気を抱えきれずに大雨が降り、まるで神様もこの悲劇に涙を流しているかのようにだった。彼女は呆然とし、棒のように突っ立ったまま振り返ると、モニカは自分と全く関係ないみたい、冷ややかな目で傍観していた。周りには多くの見物人^{けんぶつにん}が集まっていた。彼らの足音、呼吸、視線は、全てが氷のように冷酷で無情だった。その一つ一つの目は、勝手に推測し審判^{しんぱん}していた。

「あんた！モニカをイジメた上に、デラニーを崖から突き落と

（6） 憤懣 腹が立ってどうにもがまんできない気持ち。

（7） 寂靜 何もかもが静まりかえるような静けさ。

（8） 霎時 しばらくの間。

したの——」

人々の中から甲高い声が上がった。それはモニカの隣にいたある女子生徒からだった。サブリナは否定したが、皆の口を塞ぐことはできず、釈明の希望をモニカに託すしかなかった。モニカは彼女の視線に気づくと、すぐにジャンナの後ろに逃げて懇願した。

「助けて！怒らないで、来ないで、うちが何をしたっていうの？なんでうちのスマホを奪うの……？」

その声は弱々しく、哀れを誘った。モニカは女の子の前に跪いて口をパクパクとさせ訴えていた。罪は確定したとみなされ、状況はサブリナにとって極めて不利となった。皆のバラバラな議論の声が騒がしくなる中、彼女は釈明する余地がな

かった。無力感に襲^{おそ}われ、まるつきり放心状態になった。息を飲み込んだまま啞然となり、底なしの深淵^{しんえん}に落ちたようで、手足の震えは止まらない。裏切りは突如^{とつじょ}やってきて、対応策を考える間もなかった。モニカはわざと顔を向けて、邪魅^{じやみ}のような笑みを浮かべ、腕の朝顔のタトゥーが目刺さった。その瞬間、記憶が走馬灯のように脳内で駆け巡り、目が潤んだ。少女はやっと気づいた。最も致命的な一撃^{いちげき}は信頼している人から来る。彼らの関係は、たとえ友情があつたとしても朝顔の花一時。彼女は唇を噛み締め、涙を堪えたこらえた。モニカは自身が愛する朝顔みたいに、一見温厚^{おんこう}で純良^{じゆんりよう}に見えるが、深く付き合うには向いていないのだ。

(9) 邪魅 『邪魅は魑魅^{ちみ}の類なり妖邪^{ようじや}の悪気なるべし。』とあり、人間を害する妖怪の総称。

第六章 鳶尾の宿命

「静かにー全員黙りなさい！」

と叫んだブライアン先生が群衆の中から現れた。

「サブリナとモニカ、私について来なさい」

その後、ウェンディは先生の合図で、見物人を解散させ、この件についてこれ以上話すことを明確に禁止する命令を伝えた。先生はその場を離れた二人をあまり責めたりせずに、しばらくすると自分たちのグループに戻らせ、その日のスケジュールを続けて進めた。

サブリナは皆と一緒に地元で有名なお寺に着いた。仏堂に入ると、青銅色の大仏が目の前に現れた。しかしながら、心はなかなか落ち着くことができず、小さな頬は真っ赤で、頭の中は

ブンブンと鳴り響き、まる弓の音に怯える小鳥のようだった。その様子は周りの清閑で典雅な環境とは合わなかった。彼女は両手を合わせ、目をぐっと閉じていた。自身に起こった様々な乱事^{みだれごと}が錯綜する網を織りなし、運命に押しやられるがままに、よく考える間もなくこんなに大きなトラブルを招いてしまった。後悔は止まず、ただここで懺悔^{ざんげ}し、神様に諒恕^{りょうじょ}を乞うのみだった。

その後、仏堂から出てくる頃になると、ジャンナは人混みから離れた角に一人で座り、小さなボールを弄^{いじ}っていた。サブリ

(10) 乱事 無作法で騒がしいこと。

(11) 懺悔 神仏の前で過ちを告白し悔い改めること。

(12) 諒恕 相手の立場や事情を思いやってゆるすこと。

ナは一步一步近づいたが、なかなか声を掛けなかった。心が
千々に乱れ、喉が何かに絞められたようだ。脳内であらゆる語
彙を探しまくったが、最終的には掠れた声で一言を吐き出した。

「ごめんなさい!」

頭を下げたまま、体内の細胞は攣れている。ジャンナは見上
げて、少し驚いた様子で尋ねた。

「なんで私に謝るの? モニカと何かあったの? どうぞ座ってか
ら話そう」

その時点でサブリナは自分が緊張のあまり、不機嫌そうな顔
をし、その場に固まっていて、喧嘩を売っているようだと気付
いた。それで、焦燥感を抑えてバタバタと座り、両手で膝を抱
え、目は虚ろだった。

「あの……それはランチの時、あの、モニカと、私のせいで、迷惑をかけちゃったから……」

詰まりながら説明し、真実を話そうとするが、その瞬間、言語は無力で色褪せるものであった。女の子は聴きながら質問し、できるだけその語句の断片だんぺんから事件の顛末を繋ぎ合わせようとした。

途中で、レイラが近寄って来ると、サブリナはギョツとして口を噤つぶみ、顔を伏せ、体を丸めた。これは典型的な防御的姿勢ぼうぎよよせきで、罵ののられる準備はできていた。しかし今回は、予想されたような割り込みもなく、ジャンナを連れ去ることもなく、ただ二人の間にしゃがんだだけだった。慎重に頭を上げ、レイラと目が合った時、尊敬の念ねんが湧いた。そして表情が少し緩み、話

を続けながら、目の前にいる人との関係を心の中で振り返った。意外なことに、レイラは山頂にあった傍観者たちとは異なり、顔には信頼が現れていた。そして、彼女は口を出さずに、ただ黙って話を聞き、時々頷いていた。それまでの少女とジャンナの話し合いが続けられ、多くの詳細がこうして語られた。サブリナは自分がレイラを誤解していたと確信し、罪悪感が一気に湧き上がった。

「私は信じる！他の人たちはサブリナが理由もなくモニカをいじめたり、デラニーを崖から突き落としたりしたって言うけど、私は信じてない」

という言葉に、少女は自分の耳を疑った。これまで二人の間にあった恨みは一掃され、冷戦のために作り上げた壁は無声の

中で打ち解けた。

「大衆たいしゅうの話はみんな、ただの受け売りに過ぎない。やっていないことを信じる人たちには証明しなくていいから。サブリナの品性ひんせいはここにある。それが最も有力な証拠」

と立場を選びづらい時期に、心に響く発言をした。その影響を受け、ジャンナはずっとボールを弄もよほっていた手を止め、少女の手の上に手を置き、言った。

「私もサブリナのこと、信じる」

温もりが手のひらから広がり、全身に行き渡った。

雨上がりの泥道の隅で、三人は三角形を作って座り、長年ながねんの友達ともだちのようだった。デラニーは擦すり傷だけで、無事病院に搬送されたというニュースが広がった。帰路きろのバスでは、霧が徐々

に晴れ、気持ちも落ち着いた。

翌日の夜には、ゴールデンウィークの到来を祝うダンスパーティーが開かれた。夜の幕が降り、豪華な会場にはさまざまな人々が集まった。遠くから悠揚^{ゆうよう}な音楽が聞こえてきた。ジャンナがピアノを弾いている。床をはうような桜色のシフォンドレスが軽やかに揺れ動き、夜風と完璧な調和を生み出している。音符は指先から漏れ出し、流れ星が夜空を滑り落ちるように、暮色^{ぼしよく}の中を流れている。彼女は音楽を通じて、時空の中で出会った花鳥風月^{かちようふうげつ}⁽¹³⁾に語りかける。やがて、曲がクライマックスに達し、情け深く安らかな旋律^{せんりつ}が激しく抑揚^{よくよう}をつけるようになった。両手は高音と低音を行き来^{いきき}し、黒と白の音階^{おんかい}の段を駆

第六章 鳶尾の宿命

け上がりながら、ダンスパーティーを盛り上げた。曲が弾き終わり、それでも観客はまだ物足りなさを感じていた。そして椅子から立ち上がり、お辞儀をした。レイラは近くに行き、熱烈に褒め称え、遠くないところにいるサブリナが目に入った。その少女は青紫色のロングドレスを身に纏い、腰まである大きなウェーブのかかった髪を解きほぐし、手には青紫色の鳶尾の茎を掴んで切実な眼差しで眺めていた。レイラはそれを氣遣って、想いを叶えさせるために二人だけの時間を与えようと思った。だから、少女に領き、振り返ってその場を離れた。ジャンナは会場の設置された洪大な桜の木に足を運び、その大木にも

(13) 花鳥風月 自然の中の美しく風流な事物のこと。古来より和歌や日本画の主要な題材となってきた。ここでは、特に最近に遇った人や事を音楽で奏でていること。

たれかかって座り、無心むしんな姿を見せた。

サブリナは歩み寄り、反対側の木の幹に背中を当て、ジャンナのほうへ腕を伸ばしながら、試みるように口を開いた。

「バラが咲く季節になったね、前に約束したことは覚えて……」
彼女は春休みに結んだ約束をまだ覚えていた。

「もう忘れたわ。時間もないし」

と女の子は急いで話を遮った。

「少しの時間もないの？」

「うん」

という声は堅く、無感情なものだった。少女はその言葉の裏にある本音^{ほんね}を聞き取り、顔を背けて二度と声を出さなかった。最初から大きな期待をしていたわけではなかったが、今はその

第六章 鳶尾の宿命

ほんのわずかの冀望^{きぼう}も徹底的に消え去った。二人はただ木幹^{ぼくかん}一本で隔^{へだ}てられているだけなのに、遥か遠く離れている雲泥の差を感じた。

ある白い手がジャンナに伸び、それはレイラの手だった。二人は手を繋いで一緒に去っていった。サブリナの顔に浮かぶ悲しみは隠しようがなかった。彼女は手に持っていた鳶尾を一瞥^{いちべつ}し、それを思い切って引き裂^さいてから空に投げ捨てた。細切れになった青紫色の花弁が空中に舞い散り、まるで彼女たちの壊れた友情のように、ロマンチックだが儂^{はかな}く、今や散^ちり散^ちりになってしまった。それは宿命に定められた齟齬^{そご}（14）である。瞳には絶望が満ち、運命の悪戯^{いたずら}に弄^{もてあそ}ばれているかのようだった。

（14） 齟齬 くいちがつて合わないこと

第六章 鳶尾の宿命

涙がひっそりと目じりから滑り落ち、少女はドレスを引きずりながらパーティー会場を後にした。

外で降り注ぐ激しい雨は盆ぼんを覆くつがえし、まるで神様が蛇口をひねり開けたかのように、豆大まめだいの雨粒が容赦なく顔に打ちつけ、凄涼せいりやう（15）だった。彼女は傘をささず、丹念にセツトされた髪は雨で濡れて垂れ下がった。しばらく経って全身はびしょ濡れになった。しかし彼女は何の反応も示さず、ひたすら無感覚で歩み続け、最終的には蒼茫そうぼうたる雨の帳とばりに姿を消した。

（15） 凄涼 心の中や情景などがぞっとするほどのさびしいこと。